

# 都中道研

第一二四号



副会長 長野 基

(昭島市立福島中学校長)

学校休校から始まった令和二年度は、一年間思うような教育活動ができず、コロナ禍における新しい生活様式という制限の中で、授業や行事の取組に多くの苦労を重ねてきました。

本会においても、計画した年間の活動が思うようにはできず、もどかしさが残る一年でした。五月の定期総会では中止し八月にWebにて採決、年三回の部員総会・研修会も中止しました。一月に予定していた第三回研修会での「授業づくり」については、Web資料として「闇の中の炎」の指導案を二名の先生方から提案していただき、本会顧問の府中市立府中第一中学校長の森岡耕平先生からのご指導を本会HPに掲載いたしました。

また、二月に予定していた多摩市立聖ヶ丘中学校における研究発表大会では、「社会情勢の急激な変化において、共によりよく生きる力を育む道徳教育」をコロナ禍に対応する道徳科の指導のあり方を研究主題として発表の準備を進めて参りました。発表予定でした研究・調査報告への文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の飯塚秀彦先生による指導・講評は、本会HPに掲載させていただきます。さらに、全中道研高知大会、関中道研千葉大会の中止により、東京からの実践発表は研究紀要でのご報告となりました。教科化されて二年目の今年度は、共に学ぶ機会が減りましたが、各校の工夫と努力で道徳科の授業がほぼ定着しました。このことは、全中学校対象のアンケート結果で「熱心に教材研究をする教員が増えた」こ

とからも分かります。本研究会では、今後も東京都の道徳教育発展のために、多様な指導方法など必要な研究を積極的に進めて参ります。皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

## 事務局日より

一 令和三年度活動予定

主な日程は、次の通りです。詳細については、新年度に改めて、ご連絡いたします。

◎総会・研修会

令和三年六月二十二日(火)

会場 中野サンプラザ研修室

◎第一回部員総会・研修会・委員会

令和三年八月二十四日(火)

会場 中野サンプラザ研修室

◎第二回部員総会・研修会

令和四年一月十四日(金)

会場 中野サンプラザ研修室

◎第五十二回研究発表大会

令和四年二月八日(火)

会場 世田谷区立桜丘中学校

(予定)

二 全国大会・関東甲信越大会

◎第五十五回全日本中学校

道徳教育研究大会沖縄大会

令和三年十一月十一日(木)

～三十日(火)

今回の研究大会は、WEB開催となりした。開閉会式からPDFで行い、授業は動画、質疑応答はホームページ上でチャット形式によって行います。課題分科会については簡素化して二分科会となりました。講話や課題分科会での指導助言の配信も随時行っていく予定という事です。

## 大会主題

「豊かな心をもち、共によりよく生きる力を育む道徳教育の展開」

～主題に迫る発問を通して～

道徳科の授業づくり  
東京都は、第一分科会「道徳科の指導の工夫」について提案することとなっております。

◎第五十回関東甲信越中学校

道徳教育研究大会埼玉大会

令和三年十月二十二日(金)

埼玉県幸手市立幸手中学校

大会主題

「人としての生き方についての考えを深め、よりよく生きる生徒を育てる道徳教育の創造」

～学習指導要領が求める～

道徳教育の実践を通して～

東京都は、第一分科会「道徳科における多様な指導方法」について提案することとなっております。

研究部より

令和2年度 研究部活動報告

研究部長 麻生 隆久

(多摩市立聖ヶ丘中学校長)

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、研究部の活動内容や取り組み方法等を大幅に変更し、研究部会も3回にとどめ、「社会情勢の急激な変化において、共によりよく生きる力を育む道徳教育」新型コロナウイルス感染症の拡大に対応する道徳科の指導の工夫」を研究テーマとして、3つのグループに分かれ、より実践的な研究や情報交換を行い、調査活動の結果と併せて、その成果を研究紀要にまとめた。

1 活動報告

会場 多摩市立聖ヶ丘中学校

第1回 令和2年8月8日(土)

(1) 活動方針と研究主題について

(2) 研究の進め方について

(3) グループリーダーの選出

・第1グループ

三浦摩利 指導教諭

(多摩市立聖ヶ丘中学校)

・第2グループ

桶川 希三子 指導教諭

(豊島区立西池袋中学校)

・第3グループ

海老澤 宏 主幹教諭

(八王子市立中学校)

(4) 活動計画・活動日程の確認

(5) 調査活動(アンケート)について

(6) 研究の成果報告方法について

(7) 令和2年度全日本中学校道徳教育研究大会発表予定者及び内容紹介

(この間にリーダーがグループ原案を作成)

第2回 令和2年10月3日(土)

(1) グループ研究

(2) 全体意見交換

(3) 調査内容・日程確認

(4) 研究発表大会までの活動予定

(5) 研究紀要の内容と日程検討

第3回 令和2年12月5日(土)

(1) グループ研究(紀要原稿検討)

(2) 全体意見交換

(3) 調査活動進捗状況について

(4) 研究発表大会について

(5) 研究紀要の内容と日程確認

第4回 令和3年1月14日(土)

(緊急事態宣言期間中のため中止)

2 成果と課題

今年度は、グループ研究の形で進めたが、事実上は、リーダーの所属校における実践報告と言える。まず、第1グループでは、「友人関係に不安を抱えた生徒たちに考えさせたい道徳科授業」と題し、長い休校により、人間関係づくりに不安を抱えている生徒たちが、安心して通える学校にするために、三密を避けながらも対話のある道徳の授業づくりの取組をまとめた。

第2グループでは、学区内に新型コロナウイルスの感染者が多数発生した地域を抱え、道徳の教材の取扱にも配慮が必要となり、また、授業時数の削減等により、年間計画の見直しや授業の工夫に取り組んだ取組を「令和2年度 コロナ禍の道徳教育の取組」と題してまとめた。

第3グループでは、長期休業等のため、若手教員の指導力向上のための校内研修会の時間の確保が困難となり、通常の研修会以外の方法で指導力向上を図る工夫が必要となった。そこで、研修のシステムを見直し、OJTにより授業改善を図れる取組を「コロナ禍の下で授業を改善し続

ける道徳教育の取組」としてまとめた。いずれの取組も今年度の研究紀要で紹介しているので、ぜひご覧いただきたい。

また、アンケート調査からは、多くの学校で時数の確保に加え、指導方法や評価方法等についての研修にも取り組むなど、道徳科の重要性が令和2年度 研究部活動報告

研究部長 麻生 隆久

(多摩市立聖ヶ丘中学校長)

しっかりと認識されていたことがうかがえた。但し、回答数は例年の半数程度であり、依頼方法の改善が課題であった。

全体の課題としては、今年の取組はコロナ禍という特殊な状況のため、グループリーダーに大きな負担をかける形となったが、次年度は、例年のようなワークショップ形式の部会を定期的に開催し、参加者一人一人が主体的に取り組めるような研修の機会としたい。



令和3年1月14日(木)に予定されていた部員総会・研修会が中止となりましたので、当日、指導講評を予定していた講話を書面掲載します。

道徳科の授業づくりは

「生き方を読む」ことから

読み物教材

「闇の中の炎」を通して

元会長 森岡 耕平

府中市立府中第一中学校統括校長

はじめに

臨時休業の中で始まった令和2年度は授業時数の確保に向けて教育課程を大きく変更し、進められてきました。マスク着用とソーシャルディスタンスの確保により、多くの学校行事が縮小・削減され、各教科の学習ではオンラインデマンドの活用や画面越しの新たな学習場面が求められました。道徳科の授業はどうなっているでしょうか。よりよく生きることについて共に考え、共に語り合う道徳科の授業は、「生きにくさ」を抱える今こそ必要であると思います。本研究会が、研究の灯を絶やさず、取り組まれていることに心より敬意を表したいと思います。

1 道徳科の授業を創るために  
道徳科の創設、教科書の登場から2年目となりました。振り返ってみれば、「考え、議論する道徳」の教科書は各社とも、読み物資料を中心とした教材の配列とその活用を提案しています。

それは、主体的・対話的で深い学びを実現するために読み物資料が重視されているということであると思います。読み物教材は、これまでの道徳の時間の指導においても主たる教材として扱ってきた資料です。全国で様々な指導案が作成され、多様な指導方法の工夫がなされてきた教材です。

しかし、どんなに素晴らしい指導案やその実践に出会っても、自ら行う道徳科の授業で、生徒も先生も考えなくなる、話し合いたくなるような授業が思うようにつけれないことを経験します。

それはなぜでしょうか。授業の導入では何を大切にすべきか。展開ではどのような工夫があるとよいか。終末の効果的な方法とは。これらの方法に優れた事例は様々ありますが、同じように実践しても、授業は想定通りになりません。優れた事例の方

法を学ぶことも大切ですが、その方法を生かすために何が足りないのかを見出さなければならぬということです。それは極めてシンプルな視点から見つめると見えるものだと思います。

そもそも授業者（先生）として教材をじっくり読んだのか。（読めたのか。）その教材の中で、誰の、どの場面、どんな生き方について、生徒とともに考えたのか。そのためにどのような発問をしたらよいか。発問に対する生徒の発言からどのような道徳的価値（内容項目）について考えを深めたいのか。ここを見つめることだと思えます。このことを次の事例で考えたいと思えます。

2 教材「闇の中の炎」（中学校道徳 読み物資料集）文部 科学省より）を通して考える

本教材は「中学校道徳読み物資料集」（平成24年3月 文部科学省）に掲載され、その活用例にはねらいとする価値を前の内容項目4-（1）、現在のC（10）「遵法精神、公德心」においています。

資料の概要や展開例では発問と予想される生徒の発言も示されています。

ます。この教材を通して規範意識を育てるためには、「自分の中に確固たる行為の規準をもつことの大切さ」などのように生徒に実感させるか」に指導上の留意点及び工夫が求めらるとされています。このことを参考に「じっくり読む」ことから始めたいと思います。

教材を読むとは、そこに登場する人物の「生き方」を読むことだと思えます。「生き方」を読むとは、登場人物の言動（発した言葉やとった行動）そのものではなく、その基にある考えや思いを読むことです。「何をしたのか」ではなく「何を考えてそうしたのか」を読むことです。

この教材では、「父」の言葉を通して、主人公「理沙」の言動が変わります。「理沙」は、コンクールのために描きかけた作品をあきらめ、新しい作品に「夢中で鉛筆を走らせていった」と締めくくられています。最後の場面で、理沙の言動がはっきりと変化します。（何を考えてそうしたのでしょうか。）」

ここに授業の山があると思えます。でも、この決断がされるまでに理沙は「これでいいのかしら」、「これでいいんだ」と、繰り返し自問自

答します。そして、画集で見た「闇の中の炎」からイメージした作品「キャンプファイヤーの夜」を描き進めることに悩み、父に相談します。ただし、友だちの話しに置き換えて伝えます。(なぜでしょうか…)。ほつとした理沙の胸に、父の言葉が響きます。「自分がダメだと思ったらダメなんだ。」と…。この言葉が理沙の判断を決定づけます。

この場面を『優しい父の話から理沙が反省しただけのお話』としてしまえば、考えることも話し合うことも深まらないと思います。『自分がダメだと思ったらダメなんだ。』と理沙がその思いに立てたのはなぜか。理沙は父の言葉を聞く前から、『ダメかも』と考えています。作品の仕上げが進むにつれ、理沙の心は揺れます。(なぜ理沙の心は揺れるのでしょうか…)。「自分がダメだと思ったらダメなんだ。」という行為の規準は、『去年の作品』づくりでは全く意識されていないかったこと。それが今、「キャンプファイヤーの夜」の下絵づくりで自らを苦しめることになったのはなぜか…。実際に見てもいない闇の中の炎を描くのは何のため？思わず口にしたタイトルもだんだん空々し

くなっていく…。全部真似たわけじゃない。先生の励ましや友達の期待に応えるためには、コンクールの期限に間に合わせ、入賞をねらうためにはこれが必要だから…。これでもいいんだ…。そんな理沙の胸に響いた父の言葉が「そんな気持ちでいい作品はできるんだろうか。作品はずっと残るんだよ。」「その子はもうわかってるんじゃないか。」だと思えます。そして理沙は見つめ直します。「何のために絵を描くのか…。誰のために絵を描くのか。」そして『新しい作品』に真心を込めて向かっていきます。この揺れ動く理沙の思いを読みとることが理沙の決断への共感を引き出すために大切なところだと思えます。

「自ら考え、判断し、実行し、自己の行為の結果に責任をもつことが道徳の基本である。」(「中学校学習指導要領 平成30年告示 解説 特別の教科 道徳」より)とあります。これは内容項目A1「自主、自律、自由と責任」に書かれています。自らの規範意識は自らを律すること、誠実に実行すること、その結果に責任をもつことと深く関わり、自らの行為の判断につながる必要があります。

教材を読むこと、その生き方を読むことを通して、その生き方を支える思いや考えに共感したり、実感できる授業が見えてくると思います。そこから、よりよい発問づくりを考えていくことができま

す。その上で、他の指導案例や実践を参考に自分なりの授業を構想することが、見様見真似の失敗授業を一步、先生も生徒も考えたくなく授業に近づけることになると思います。

話し合いの方法をどうするか、役割演技など体験活動をどうするか、板書や提示物、ICTの活用は、その後に必要ならば取り入れるものだと思います。

「自分はこう思う。(と、発言したくなる)」「なんでそう思ったの？(と、対話が広がる)」「そんな考えもあるんだ…。(と、気付きが生まれる)」「なんか楽しかった(と、温かい空気が広がる)」「それがよりよく生きることについて、生徒も先生も共に考え、共に話し合う道徳科の授業だと思えます。そんな授業をめざしたいと思います。

おわりに

本校では二学期に1・3年生各学級で同一教材(「二枚の写真」)での授業、授業後に学年合同の意見交流会(終末の共有)を実施しました。全校集会ができません中、共に学ぶ喜びを共有しました。今を生きる思いを共有しました。「何ができるか」知恵を出し合い、乗り越えていきたいと思えます。

編集後記

日頃より、都中道研の活動にご理解、ご協力いただきありがとうございます。

この度、広報第一二四号をお届けいたします。今後も、ご協力のほど、よろしくお願い致します。

広報部

部長 生野 まゆみ

(調布市立第四中学校校長)

副部長 佐藤 正敏

(足立区立第十四中学校副校長)

都中道研のホームページ

<http://www3.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=1350004>

<http://www3.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=1350004>

<http://www3.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=1350004>

